しかし、現在の伊勢一丁目あたりには「御膳水」といわれた水質の良い井戸水もあり、この水を売りあるく水売り屋さんが二十一軒もありましたが、この水を買うことができたのはごく一部であり、多くは非衛生的な井戸水を使用せざるを得なかったわけであります。　明治二十二年七月一日甲府市制が施行され、市民の第一の望みは衛生的な上水道をつくることにありました。

しかし、上水道の水源として荒川から取水することは、下流の農民との問題もあり、また日清、日露の戦争が勃発したこともあって、なお二十年も待たなければなりませんでした。

明治四十二年山梨県が仲介となり、農民との同意を得て全国で十七番目の上水道として、国の認可を受けて工事を着工し、大正二年一月から二十六番目の上水道として給水を開始しました。

きれいな水がつきることなくほとばしる上水道の完成は、市民にたいへん喜ばれました。

水道が住民の文化的な生活や都市・産業活動の基盤施設としての地位を確立し、その社会的重要性を求められる中で、本市水道はその後五期にわたる拡張工事を進めてまいりました。

第一期拡張工事は昭和八年、荒川からの増量取水と農民の農業用水確保を目的に「溜池」を二つ造りましたがその一つが丸山の貯水池、現在の千代田湖であります。年々水需要の増大に伴い拡張工事をかさね昭和六十三年三月第五期拡張工事を終了しました。

この工事には山梨県と共同で完成させた荒川ダムの建設が含まれています。

荒川ダムは多目的ダムとして主に三つの目的をもって建設されました。一つには洪水調節、二つには正常な流水機能の維持、沿岸既得用水の補給、三つには上水道用水の確保であります。

このダムの完成と第二期拡張工事で完成した昭和水源（地下水）により、武田氏の時代から延々と水不足に悩み続けてきた甲府市も当分の間、水の心配がなくなりました。

今日の社会経済情勢の大きな変化に伴い、当面する課題に適切に対処し、水道本来の使命である清浄にして豊富低廉、さらに安全でおいしい水を一時たりとも休むことなく供給することが出来るのも、恵まれた自然環境と先人たちの情熱と努力、そして住民のみなさまのご協力によるものであり、この場を借りて深く感謝する次第です。

（水道事業管理者・前市史編さん委員）

酒折宮の連歌と片歌（かたうた）

古屋　高治

新治（にひばり）　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる
かがなべて　夜には九夜　日には十日を

『古事記』が、日本武尊と御火焼の老人が甲斐の酒折宮で唱和したと伝えられるこの片歌問答は、後世、連歌の起源と考えられるようになった。そのため、甲斐の国学者・文人・歌人たちの間では、明和・安永・天明のころ連歌が盛んとなり、他国に向かっ

て連歌の宣伝・普及に努めたという。

全国の文人・歌人は連歌発祥の地酒折宮の参拝を念願としていた。その中の一人として、賀茂真淵の門人多気（建部）綾足が来申した。彼は万葉集を中心とした古典を究め、その説が甲斐の国学者にも影響を与えていたという。

綾足は、酒折宮の連歌から片歌を研究し、数カ月甲府に滞在して『片歌論』を刊行している。甲斐の国学者達は、彼から古典・片歌などの指導を受け、江戸と甲斐とが協力して片歌の発展をはかった。これにより酒折宮は片歌発祥の地として位置づけられ、その初代は綾足、二代目は真淵門下の鯨丸、三代目を甲斐の国学者天目が継承したといわれている。片歌の数は千数百首にも及んだというが、その中の二、三首をあげてみよう。

婦しのねをふりさきみれば久方の　（綾足）
　天雲の上に雪ぞ降りたる　（涼垈）
雲ならでめぐり来にけり此の道　（元克）
　馬とも云わず足にまかせて　（総翁）
心あらばしばし晴れよ空の雲　（憲時）
　夜半にながれぞみつの月かげ　（総翁）

片歌三代目の志村天目は指導者としての教養を身につけ、心学・片歌を熱心に教化した。彼の「天目山人名簿」によると、甲斐では約九〇カ村に門弟約三五〇人があり、甲斐以外では信州・駿州・出羽・能登あたりまで一三カ国にも及び、門人は約百人に達したという。心学教化の際には、「片歌縮地の杖」を使用した。

安永三年、片歌の師、綾足が熊ケ谷の門人宅で客死し、第二代目の鯨丸は、天明五年に萩原元克宅で亡くなるが、片歌は天目が死去するまで、約七十年間その命脈を保った。

酒折宮は、連歌・片歌の発祥地として日本全国に知れわたり、信仰に係わる歌が数多く捧げられていたが、残念ながら戦災で焼かれて、現在に伝わっている歌は少なくなっている。左に歌と俳句を掲げてみよう。

榊葉のかわらぬいろもとことはに
　まもるめぐみを祈る神垣　　岩倉伴　らまち

跡たれし昔ぞとおき酒折の
　さか行代々を仰ぐ神がき　　栂井一室

しら雪のふるきにかへれ神垣も
　道有御代はあとをたづねて　　本居宣長

千萬のあづまのみえしむけましし
　かみのみいづをあふがざらめや　　加茂季鷹

なつすぎていく夜か寝つる神垣の
　まつに涼しき秋風の声　　加茂季鷹

語りつつお歌と共に萬代に
　つぎて栄えん酒折の宮　　本居宣長

九夜と松ふく風のひびくらし
　とほき神代の昔ながらに　　山本忠告

新治のその言の葉を文に見る
　あともかしこし酒折の宮　　源光章

萬代に神さびたてるさかきばの
　かげもさかゆく酒折の宮　　萩原元克

酒折のもりながなれや焚し火の
　光りは今も消せざるらん　　飯塚久利

日本武神の尊の此の宮に
　いたたせりけんいにしえおもほゆ　　腰巻正興

むかしに返せ甲斐の国人　東久世　通禧伯

いくぞたびくりかへしよむ石ふみに
宮居のあとはちよもうごかじ　詠人知らず

瑞垣の世々にさかえんしるしには
まつも木高き神のひろまへ　日野従一位資枝卿

くれぬまの嵐はたえて酒折に
枕かる夜のあめになるおと　冷泉中納言為綱卿

国安く守るかいある神垣に
ひくしめ縄のかけて久しき　植松従二位賞雅卿

ふえきそのちとせの春のひかりをも
みせてさかゆく軒のまつかえ　源　憲時

いにしへゆ今も云ひつく此の宮に
新額つきけん火ともせる老翁　萩原元克

萬代に神さびたてるさかき葉の
影のさかゆく酒折宮　萩原元克

俳句

燈ともしの神もめずらん月今宵　辻　嵐外

月の雲雲からさきにはなれゆき　辻　嵐外

流れ三日を中心として夫に活躍した甲斐の国学者は、加賀美光章・萩原元克・飯田正房・堀内憲時などと思われる。

（調査協力員）

石造物聞きあるき

山田武雄

市内の石造物調査のためいくつかの寺院や神社を訪ね、そこにある石造物についてご住職や神主さんよりお話を伺った。本稿ではそれらのなかから、興味と関心をひかれるような話をいくつか紹介してみたいと思う。

一　愛宕神社

平成元年六月十日、愛宕町愛宕神社の神官を訪ね、境内にある「大石棒」について話を伺った。以下はその概要である。

地元では、これを何と呼んでいるか分からないが神社所蔵の記録には「お鳥観」とあり、これはもと華光院裏山の白鬚大明神にまつられていたが、いつのころか水害か何かでここに流され落下してきたもののごとくである。毎月きまって女性がここへ来て、これにさわって安産祈念をしている。

次に社の石段下に立っている石灯籠について話を伺った。

この灯籠の立っている所は元真言密教宝蔵院のあった所なので、銘にあるように多分その檀家の宇田安周なるものが万治四年五月吉日に奉納したもの